

地域の森を育てる 人を育てる

武部豊樹（武部建設）

北海道の木材

北海道の地域材として利用されている木材は構造材としてはカラマツ、トドマツ、スギ、そして少数ですがエゾマツがあります。カラマツは本来北海道の自生種ではなく、開拓期に信州から移入したもので、炭鉾の坑木や防風林として利用されたものです。炭鉾の閉山で使われなくなり、現在は道産材のメイン樹種として活用されています。

次に多いのが戦後の拡大造林で植えられたトドマツ、そして函館方面の渡島地方に自生しているスギ。このスギは従来秋田方面に送られて道内ではあまり使われてなかったのですが、近年は利用が進められています。このような状況から、今後はカラマツに加えてトドマツが主要な建築用材となると考えられます。

社有林のこれから

当社は10ha弱の社有林を所有しており、先代が植えたカラマツ、トドマツの人工林です。林齢は60年を越し伐期を迎えています。現在は利用に応じて択伐をしています。



写真1 林業のベテランに森の仕事を教わる



写真2 大工が森に入って伐採する



写真3 伐り出したカラマツを構造材に

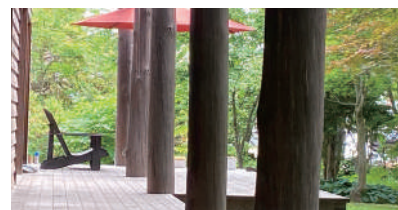


写真4 断熱区域外の構造材として使用



写真5 墨付けをする大工

がら、自然更新で育ってきた広葉樹との混交林に誘導していこうと考えています。しかし、今まで間伐を計画的にしてこなかった時期があり、中には細物も混じっています。これらを折に触れて間伐し、後述する板材として利用しています。今回、当社における、道産材利用の特徴的な事例を報告したいと思います。

道産材利用の事例

● 冬期間の仕事の確保

当社は大工を昔から社員として雇用していますが、積雪寒冷な気候の北海道においては、冬期間の仕事の確保が大きな経営的リスクでもあります。

そのために仕事の薄くなる冬に、大工が山に入って伐採仕事をする必要があります。それがまた大工が木を知ることにもなっており、木造建築を生業にする企業として一石二鳥の活動と思っています。結果としてチェーンソーを持って山に入り、林業としての伐倒ができる大工が育って

います（写真1、2）。

● 伐採した木材を構造材に

このように伐り出したカラマツを丸太のまま長材の構造材として使います（写真3）。ただ含水率の不安定な丸太をそのまま高断熱高気密の室内空間に使うことはリスクが高く、基本的には断熱区画外の構造材として使うこととなります（写真4）。その場合、設計力と丸太を墨付け手刻みができる大工が必須であり、それができていることが当社の競争力にもなっています（写真5）。

● 間伐材の利用

また前述の間伐材も耳付きの挽き板として外壁に利用しています。一般的にこの程度の間伐材は山に捨て伐りされることが多いのですが、普通の外壁材より厚い1寸厚として無塗装で張ることによってお客様の納得を得ることが出来ます（写真6、7）。

● 資源の有効活用につながる

このような活動は、一般的な木材の流

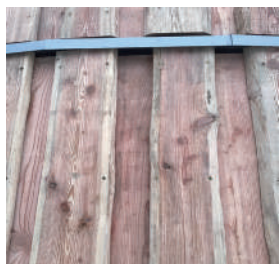


写真7 岩見沢市郊外に建つ森の研究者の楕円形の書庫。間伐材と職人の手仕事が見えている



写真6 古材と丸太を構造に使用したレストラン。テーブルもカツラの差し鴨居を再生



写真8 山に入って原木を買う

れとは異なり、山から直接作業場に来ることによってウッドマイレージ的にも、未利用材を有効に使うことによる資源の有効活用面でも、また丸太を使うことによる建築構造とデザインの面において多くの利点があると思っています。

林業・木造建築で培ったノウハウ

● 山に入り原木から仕入れる
当社はもともと創業時は林業を生業としていて、その後、製材工場を経由して現在は木造建築業をしています。その歴史の中で培ってきた木に関するノウハウを豊富に持っています。それらの経験から、山に入って林業家から直接原木を仕入れることもあります(写真8)。

最近、地域の森林組合から買入



写真9 製材工場にて

れたり、また富良野にある日本最大22500 haの東大演習林から良質な広葉樹(マカバ、ミズナラ、センなど)を原木で仕入れたりもしています。それらの原木を昔から付き合のある製材工場で賃曳きして(写真9)、建具や家具、内装材として使います(写真10)。

● 古民家再生
また当社は北海道では珍しく、開拓時代の古民家の再生事業も手がけています。明治期から本格的に開発が始まった北海道には良質な木材が豊富にあり、それらを構造材として惜しげもなく使った古民家が少なからず残っています。その古材を新築の建物に再利用することも、事業の一つです(写真11)。

● 大工育成と地域材の活用

このように当社では、木造建築にさまざまな形で道産材を使うしてきました。我国においては、現在、脱炭素社会を目標に、木の建築には追い風が吹いています。木造建築の基幹技能者である大工の育成をはじめ、地域材を使うことを競争力にしていくことが、地域の工務店が生き残っていくための大きな道であると考えています。

(北海道・正会員・登録事業者)



写真10 写真7の書庫の内観

写真11 新築のレストランに古材を利用